

## 二つの顔をもった奴隷

メアリー・キャロリン・ディヴィス 作

山本裕実 訳

### 登場人物

命 (奴隷)	男
娘 1	若い男
娘 2	労働者
女	その他

### 寓 話

場面は森の中、そこを歩いて小路がある。小路にそって、野ばらのしげみやその他の木がある。小路の反対側には二人の娘が人待顔に立っている。彼女たちは互いに顔を見ようとはしない。娘たちは便利な上衣を着ている。

つまり、冠をかぶればそのまま女王様のようになるし、冠をとると百姓娘のようになる。娘(1)は冠をかぶっているが娘(2)はなにげなく冠を手持っている。

娘 1 (娘 2 を見ながら) 誰れを待っているの?

娘 2 命よ。

娘 1 わたしも命を待っている。

娘 2 命はこの路を通るってうわさだけど。本当かしら?

娘 1 どんな道でも通るわ、あの人。

娘 2 (息をはずませながら) 命に会おうと思って、わたし、走ったわ。

娘 1 命が恐しくないの、あなた？

娘 2 恐ろしいわ。だから会おうとして走ったの。

娘 1 (自分自身に) わたしも走った。会うために。

娘 2 ああ、命が来るわ！

斬 1 違う。あれは只の木の葉よ。かさかさ音をたててけんかしているの。

それと風の声。いつも木の葉を迫らばらおうとしているわ。

娘 2 でも木の葉は動こうともしない。

娘 1 時間がたてば行ってしまうのよ。風はそのことを知っているわ。

娘 1 どうして冠をかぶっていないの、あなた？

娘 2 なぜかぶってなきゃいけないのかしら？ (冠を頭にのせる。)

娘 1 知らないの？

娘 2 知らないわ。

娘 1 命の前じゃ、冠をかぶっているのが一番、賢明なのよ。

娘 2 わからないわね。

娘 1 殆どの人がその賢明さってものを理解していないわ——賢明さを  
最も必要とする人たちすらね——

娘 2 命がやって来る！音が聞えたもの。

娘 1 花びらの音よ、あれは。ばらの木から落ちたんでしょ。

娘 2 わたしは待っていたのよ——

娘 1 みんな、命に懂れてるわ。命のために大声をあげたい。命が来れば  
わたしたちを傷つけるし、悩ますわ。もしあの人の秘密がわからなければ  
殺されてしまうのよ。

娘 2 秘密ってなあに？

娘 1 それはね、命が奴隷だっていうこと。あの人は知らない振りをして  
いるの！そんな素振りをね、でも心の中では自分が奴隷だっていうこと  
をいつも自覚しているわ。命の秘密を知っている人たちだけを、あの人は  
恐がっているのよ。

娘 2 もっと教えて!

娘 1 命はね、自分を恐がる人たちには暴君になるの。命は——王さまや女王さまには——従順なのよ!

娘 2 だから——

娘 1 冠なしでは決して、決して命にわたしたちの姿を見せてはならないのよ。

娘 2 どうしてそんなことを知ってるの?

娘 1 ある賢い老人から教わったの。町の人口の外に坐っていたわ、その人。

娘 2 その人、どうして知ってたのかしら? 王様の一人だったからなの?

娘 1 違う。その人も命を恐っている一人だったからよ。

娘 2 (夢みるように) 命ってとても美しい男だって聞いたけれど。そうなの? それから命はぎょっとする位、見苦しいってことも聞いたわ、口は大きく裂けて、気味悪く笑っているし、目は斜視だし、大きな鼻の穴をしてるって。本当にそうなの? それとも——あの人、とても美男子なのかしら?

娘 1 自分の目で確かめるといいわ——ああ——

娘 2 (森の小路のはるか向うの曲り角に命がぶらぶら歩いているのが見える。彼の顔付きはなんとなく醜悪に見える。娘たちの冠の宝石が急に太陽の光に反射したので命は娘たちに目を止める。その時の命は非常に美男子に見える。)

娘 1 わたしたちの冠を見たわ、あの人!

娘 2 まあ!

娘 1 いいわね! あなたは安全なのよ——あの人のご主人さまでいる間はね。命が奴隷だってことを決して忘れちゃ駄目。そしてあなたは女王さまなのよ。

娘 2 (自分に) 冠なしでは決して命に姿を見せないわ。

娘 1 しーっ！ 命が来る！

娘 2 命ってとても素敵——

娘 1 あの人が奴隷でいる限りはね。

娘 2 (聞えない) 命って——とても素敵だわ——

娘 1 命！

(命、彼女の足元にひれ伏す。)

娘 2 (喜んで) まあ！

娘 1 命！ 大皿にオパールが欲しい。山盛りよ。

(命 承知して頭を下げる。)

娘 2 まあ！

娘 1 それから真珠も！

(命 頭を下げる。)

娘 2 おう！

娘 1 それから、垣根のある小さいお城も欲しい。

(命 おじぎする)

娘 2 その通り——

娘 1 わたしに耳ざわりのいい言葉を考えてくれる素敵な王子さまが欲しい。それからいちごのパイも。パイの皮には小さなひだを一杯つけるのよ。さあ、今いったものが用意してあるかどうか見て来なさい。

(命 承知して頭を下げ、立ち去ろうとする。)

娘 2 驚いたわ！

娘 1 どう？ こういう工合に振るまわないといけないのよ。あの人を扱うにはこうしなきゃね。さもなきや駄目ってこと。さあ、今度はあなたがやっごらん 自分で。(彼女、そばのばらのしげみから花を一本取る。そして指でそれをもてあそぶ。)

娘 2 命！(命 ひざまずく。) 金の上衣が欲しいわ、わたし。(命 頭を下げる。)

娘 1 その通りよ!

(命の頭上で二人の娘は彼の従順さを楽し気に笑う。)

娘 2 それから散歩ができるようなかわいい庭園も欲しい。トランペットの音も聞こえてくるようなお庭よ。

(命 頭を下げる。)

娘 2 とても素晴らしい規則だわ。

娘 1 (立ち去ろうとする奴隷を呼びながら) それから灰色の馬も欲しい。

(命 頭を下げる。) 可愛いお小姓も一人ね。金髪で小さなえくぼのある子にして。(命 心よく引受けて行きかける。)

娘 1 (身振りで彼を呼び止める。) 命! (暫く考えたのち) えくぼは二つよ!

娘 2 それから、琥珀の首かざり。琥珀の首かざりを持って来て!

娘 1 (手にしていたばらの花を投げながら。) それから新しいばらの花もよ。(命 おじぎをし、立ち去ろうとする。二人の娘はこの冒険や、素晴らしい成行きに喜んで体をふるわす。)

娘 1 命!

(命 立ち上る。)

娘 2 なにをしようっていうの、あなた?

娘 1 ここへ来なさい!

(命 娘1娘に近づく。彼女、素早く命の首にかけてある金の鎖りをひきちぎる。)

娘 2 (驚いて。) そんな無茶なこと、どうしてするの?

娘 1 目に入るものはとらなきゃ駄目なのよ。

(彼女、命の手首を掴み、腕輪を取り上げる。)

娘 2 (驚く) まあ!

娘 1 あっちへ行け!

(命 退場。)

娘 2 だけど、どうして——

娘 1 物乞ひされるのは嫌いよ、命って。いいわね。あの人は奴隷なんだから。

娘 2 命ってとても美男子!

娘 1 あなたの奴隷だってことを呉々も忘れては駄目。このばらのしげみはね、(手を触れる) 奴隷だっのを忘れた元の女王さまよ。

娘 2 まあ!

娘 1 (道ばたに沿っているしげみの一部のように見える骨を指して。) これもね、やっぱり奴隷であることを忘れてしまった他の人たちの骨なのよ。

娘 2 だけど命って素敵!

娘 1 あなたが命の主人でいる限りわね。

娘 2 でも命ってとても親切だわ!

娘 1 あなたが命を恐がらない間はね。

娘 2 だけどあなた、ひきちぎったじゃないの——

娘 1 命だけよ。わたしたちが不礼に振るまっていたのは。

(舞台裏で群集のうめき声、叫び声や鋭いおびえたような声が聞える。)

娘 2 あれはなにかしら?

娘 1 こっちへいらっしゃい! 姿を見られたらまずいわ! (舞台横のしげみの後へ娘 2 を引っぱりこむ。)

娘 2 なにをされるのかしら?

娘 1 静かに! 命に見られたらどうするの? 恐怖の最初のしるしをあの人はいつも探しているんだから。

娘 2 恐怖の最初のしるしってなにかしら?

娘 1 それはね、考え方よ。

娘 2 でも、他人の考え方なんてあの人に見えるのかしら——

娘 1 恐怖心だけは見えるわ。

娘 1 もし、その恐怖心をわからないようにかくしてしまったらどうなの？

娘 1 それでも駄目。でも言葉の方がもっと危険なの。もし恐ろしいわなんていおうものなら、もっともっと恐くなってしまおう。恐いと口に出していえばそれが体に現われるんだから。

舞台裏の声：ああ、ご主人さま！お慈悲を、ご主人さま！

娘 1 あのへつらうのような声、あれが命を台無しにしているのよ。いい召使いを増長させるんだわ。命が自分の分際を守っている限りは——  
(男が一人登場、ひざまずき、舞台裏にいる命を恐怖に満ちた顔付きで見る。)

娘 1 (男にそっと近づき、話しかける。) あの男は只の奴隷なのよ。あれが奴隷だってことわからないの？

男 どうしてそんなことがいえるんだ？ あのものすごい顔付きを見るがいい。あの顔を見た者は、命がご主人さまだとまちがいに思うだろう。しかもかなり残忍なね！

娘 1 あなたがそうさせなければ、あの人は主人になることはできないのよ。

男 一体、なにをいってるんだね、あなたは？ それは本当かな？

娘 1 ええ。本当よ。口先だけでいったとしてもそれは本当なのよ。

男 (立ちあがろうとするが、再びひざまづく。) ああ、本当だということがよくわかった。でもあっちへ行っておくれ。

娘 1 (再びしげみの中へうずくまる。) あら？

(命、多くの皮ひもをよりあわせたむちで、ごちやごちや半ばしゃがんでいる大勢の男や女たちを追いたてながら舞台に現われる。彼らはひざまずき、彼の上衣に接吻する。彼の口は大きく、気味悪く笑っている。目は斜視で鼻の穴は大きい。ぞっとするような恐しさである。)

命 こら、おまえの理想をよこせ。三つよこせ。これだけしか持っておらぬのか？

若い男 命がわたしの理想を奪うんだ。

労働者 わたしのも取られた。

若い男 理想なんて殆んど持ち合わせてなかったのに。

労働者 一生懸命働いて、少しでも理想を持つと、又、それを取られてしまふんだ。

命 (老女にむかい) 十二時間お前の嫌な仕事をするんだ。

一時間はおまえの好きな仕事をやれ。それは心の傷をいつもあらたにし、苦しみをより強くするためだ。

老人 ああ、情けない！ そんなに酷いことはしないで下さいませ。好きな仕事を忘れさせて下さい。

命 犬め、わしのいう通りにしろ。物乞いしたからってわしからはなにも得られぬぞ。

声 夢が欲しい！ わたしの手が強くなる夢が！

他の声 ほんのわずかな愛情が欲しい。一日が少しでも恐しくなく過せるような。

もう一つの声：休息が欲しい。わずかばかりの休息が！ 海を想い出し、風の吹いている野原を思い出せる時間が欲しい。

女 ご主人さま！

(命、むちで女を烈しく打つ。女、悲鳴をあげる。命、彼らから身を引く。ふざけた踊りをしながら、すごい声で笑いより恐ろしい怒りに燃えたつ。又、彼らをむちで打つ。何人かの者は死ぬ。びっこの人の首を手でしめる。遂に彼らを舞台から追ひ出してしまふ。数人の者はそろそろと体をひきずるようにして歩く。)

娘 2 (二人の娘、かくれていた場所から姿を現わして。) まあ！ 命のあんな顔、絶対に見たくないもんだわ！

娘 1 命の前にひざまづかなきゃ、見なくてすむのよ。だから絶対にひざまずいたらいけないわ、女王さん。

娘 2 絶対にひざまづいたりしないわ、命の前では。あなたに教えられたように真直に立って、“もう一本、首かざりを持って来なさい命” っていうてやるわ。

娘 1 わたし、一寸行かなきゃならないわ。すぐに戻ってくるけど。忘れちゃ駄目よ。(娘 1 退場。)

娘 2 わたし、いってやるとも——

(舞台裏で命の声聞える。娘 2 驚いて立ちすくむ。命、登場。)

娘 2 奴隸よ！ 赤い宝石のついた鎖が欲しい！

(命が恭々しく近づいて来るので彼女は命の首からそれを奪い取る。) それからこれも！

(彼の手を掴み指から指輪も取る。奴隸は頭を下げる。彼女、突然、死人のいた場所に目をやり、身ぶるいする。)

命 (丁度彼女の恐怖のまなざしが見えるように命、頭を持ち上げる、この瞬間から、彼の外見は段々、奴隸から暴君へと変る。) わたしが恐ろしいんですね。

娘 2 いいえ 恐くないわ。

命 わたしを恐れている者は大勢いますよ。

娘 2 おまえは奴隸よ。

命 わたしを恐れている者は沢山いる。

娘 2 只の奴隸じゃないの。おまえなんて。

命 奴隸だってご主人さまになれます。

娘 2 うそ。

命 だからわたしだって——

娘 2 わたしの奴隸よ、おまえなんて。

命 もし、あなたのご主人さまだったらどうします——

娘 2 おまえは奴隸。

命 もし、わたしがあんたの主人になれば親切にしますよ。あんはた美し

い。

娘 2 まあ!

命 あんたはとても美しい。

娘 2 わたしが美しく見えるのは、冠のせいよ。

命 もし、冠を取ればもっと美人になるでしょうに。

娘 2 それだけはしないわ。

命 あんたは美しい。まるでりんごの木のそばの大きな花に太陽がほほえみかけている時、その側でかすかに赤く燃えているりんごの花びらのほほのように。あんたは美しい。まるで森の奥深くで水蓮のつぼみを抱きかかえている小さな池のように。あんたは美しい——

娘 2 (独白で。) 命はわたしに恐がってもらいたいんだわ。だからそうやってやろう。男の人ってそんなものだって聞いたことがあったわ。わたしは一寸も恐しくはないけど。あの人を喜ばせるためにそういおう。

命 わたしが恐しいでしょう?

娘 2 ええ。

命 恐しい?

娘 2 ええ恐しいわ。

命 やれ嬉しいことだ。

娘 2 (独白で。) あの人を喜ばせることができると思ってたわ、わたし! 口に出せばなんでもそれがわたしの身の上に現われるってあの娘は知ってたけど——例えば恐怖なども——だけどあの娘だってなんでも知ってる訳ではなし。なんでも知ってるなんて不可能なことだもの! それにとって楽しいわ——あの人を喜ばすなんて——おまけにとても簡単なこと。命なんて恐くない。只、恐ろしいっていっただけのこと。

命 冠を頭から取っていただけませんか?

娘 2 嫌よ。

命 風になびく女の髪ほど美しいものはないんですよ。冠の下からあんた

の髪が見えてます。さぞ美しいだろうなあ、風に吹かれたら。

娘 2 (冠をはずす) じゃあしばらくの間だけよ。

命 ああ、美しいなあ、あんたは。

娘 2 (自分に。) 馬鹿なことをしたのかも知れないわ、わたし——

命 咲きたての花のようですよ、あんたは。その鮮かな色で飛ぶ鳥の目をくらますようだ。

娘 2 冠を取ってはいけないってあの娘がいったわ——

命 あんたはまるで飛び交う鳥のようです。髪の毛は太陽に映えてきらきらしているし。

娘 2 わたしを傷つけたりしなかったわ、あの人。

命 海の底に沈んでいる古い商船から集めた宝石のようですね。この冠は。拝見してよろしいか？

娘 2 (用心深く彼の方へ冠を差し出す。急に気を変えて) 嫌だわ。

命 自分の手で触らせて下さい。必ずお返ししますから。

娘 2 嫌。

命 お返ししますってば。

娘 2 必ず返してくれるのなら——本当に。

命 (冠を手取る。) でも冠がないほうがあなたの髪はずっと美しいんですよ。(冠を投げる)

娘 2 なにをするの？

命 ほんの冗談ですよ。

娘 2 だけど約束したじゃないの、あなたは——

命 冗談、冗談。

娘 2 でも——

命 ほっほっ！ 笑って下さいよ。とんだおふざけだ！

娘 2 (笑う。そして身ぶるいする。)

命 (上気嫌で。) 踊りましょう。あなたは若い。幸せ者だ。さあ踊りまし

よう!

娘 2 どんな踊りにしようかしら?

命 春の踊り, それもやっと氷がとけ, 海と一緒になるのを待ちのぞんでいる, 流れる小川の踊り。そしてお月さまの下でふくらんでいる白いつぼみの踊り, それからカーテンの閉まった部屋で若い娘が眠っている, 太陽がその娘の目をさます踊り——

娘 2 (それらを踊る。最初は命を恐がっていたが, やがてそれを忘れ, 自由に踊る。) さあわたしの冠を返して頂だい。

命 冠などあんたは要りませんよ。可愛いんだから。

娘 2 おまえが恐しい!

命 わたしが恐しいって? なにをしたというんです?

娘 2 わからないわ。

命 恐がってはいけません。

娘 2 恐い。

命 親切なご主人さまになりますよ。

娘 2 ご主人さまですって?

命 親切なね。

娘 2 おまえはわたしの奴隷よ。

命 二度と決しておまえの奴隷にはならないぞ。

娘 2 やはりあの娘は正しかったのかしら? もし本当だったらどうしょう?

命 なにをいっているんだ?

娘 2 別になんにも。

命 わしをご主人さまといえ。

娘 2 いやよ。そんなことはいえないわ。

命 [彼女を横目で見ながら] ご主人さまと呼ぶんだ。そうすれば親切にしてやろう。

娘 2 いや。わたしにはできない。

命 (小路からむちを拾いあげそれをもて遊びながら彼女に向かって笑う。)  
そうすれば親切にしてやるぞ。

娘 2 ご主人さま。

命 なんといい心地よい響きだ。

娘 2 あなた返してくれるんでしょう。

命 厚かましい奴だ。おまえをひどい目にあわせないだけでも有難く思  
え。

娘 2 わたしをぶったりしないわね?

命 もしいうことを聞かなかつたらぶつぞ。

娘 2 (囁く。) あなたはぶったりはしないわ。

命 さあひざまずくのだ。

娘 2 (くり返す。) 絶対にひざまずかないのよ。小さな女王さま——

命 わしの前にひざまずくのだ。

娘 2 嫌よ。

命 (むちを振り上げ、ぶとうとする。)

ひざをつくんだ? 奴隸!

娘 2 あんたは親切だったわ 命、親切だった。わたしに美しいことばを  
聞かせてくれた。

命 ひざをつけ。

娘 2 いつも親切にするってあんたはいったのに——

命 いうことを聞くか?

娘 2 絶対に嫌だわ。

(命 彼女の肩のあたりにむちをまきつける。)

娘 2 (悲鳴をあげる。) わたしをむちでぶたないで。ひざまづくわ。(ひ  
ざまづく。)

命 よし。こうやってやっとなつ順を勝ち得ることができた。

娘 2 ご主人さま!

命 快い響きだ。

娘 2 お慈悲を。どうぞお慈悲を下さい。

命 泣くな。(彼女をける。)

娘 2 (よろよろしながら立ちあがる。) どうぞお許し下さい。

命 おまえをぶってやる。わしを恐れる奴らの叫び声はわしの耳を楽しませて呉れるのだ。(彼女を打つ。)

娘 2 ご主人さま!

命 (むちを側へ投げ出す) 静かな泣き声はもっといいものだ—(彼は彼女をつかまえる。二人もつれ合う。)

娘 2 命は強すぎる。——もうこれ以上わたしには争えない。

(二人は争う。命は彼女を締め殺す。そして彼女の体を投げ出すやがてぞっとするような笑い声をあげながら退場する。)

娘 1 (楽し気に跳ねながら登場。歌をうたっている。)

へいホー、四月になれば、

へいホー、へいホー、

四月になれば町はみんな

陽気になる、陽気になるの。

(彼女、しげみからばらをつみとる。)

へいホー、四月になれば

楽しい楽しい四月には

恋人がやって来る。

晴れた或る日のこと

道で恋人に出会ったの!

へいホー、四月になれば

へいホー、へいホー

(突然、死体に気付き歌をやめ、立ち止ったまま、見つめる。やがてゆ

っくりと近づけて行く。死んだ娘の服をなでる。死体のそばにひざまずく。囁くように。)

あの娘は若かったのに… 命は残酷だったわ… (死体に手を触れる。) 女王さまだったわ。あの娘は、命のアクセサリーをひきちぎったのに。ほら、金に真赤な宝石をはめ込んだ命の鎖をしているのに。指にはあの人の指輪もはめているし。だけど命は強すぎたのね——あまりにも強かったんだわ。——(立ち上りふるえ、恐しさにすくむ。) 命はあの子を殺した…命はみんなを台無しにしてしまった。いつの日にか…わたしも恐がるわ。命を……

(命 醜い暴君のままの姿で登場。彼女立ちすくんだままでいる。彼の目がゆっくりと無台を見廻す。彼の目にとまる寸前に彼女が命を見る。彼に見られる前に持前のけいべつした様子で身体を真直ぐにのぼす。彼女が喋りかけると命は再び奴隷になる。)

娘 1 (ばらの花を無造作に投げる。それが死体の上に落ちたのを見ようともしない。)

命、新しいばらを持って来なさい! (奴隷みじめに頭を下げ彼女の命令に従うために退場する。)

### 作 品 解 説

人間らしく生きるということはいつの世にも非常に困難なことである。

“*The Slave With Two Faces*”では「命」と「二人の娘」を対決させることによって人間の生きることのきびしさ、つまり人間性を確立させた生き方のきびしさを説いているのではなからうか。

恐しいと思った瞬間に「命」に負けるのであれば娘たちは瞬時の油断も許されない。絶えず優位に立ち主導権を持ち続けるように努力をしなければならぬ。しかし「娘 2」が経験したような心のゆるみ、甘えは絶えず我々の日常生活の中にしのびよっている。しかも「娘 2」は「命」と対決す

るすべを知りながら一瞬の油断のために奴隷にされる。そして明日への希望もなく生けるしかばねのような男女の群れや、「命」との対決を否定したためにばらのしげみのような物言わぬ存在にされた者などを目のあたりにしながらもなおかつ負け、その弱者の群れに加わり、自らをほろぼしてしまうのである。

現代社会において人間性を否定して生きている弱い者がいかに大勢いることか、そしてそのようになる要因を我々がいかに沢山持ち合わせていることか、色々と考えさせられるのである。

「命」に対して最後まで自己を見失しなわず、勝ち残った「娘 1」の幕切れの台詞。

“Life has broken them all... Someday . . . I am afraid . . .”

はその意味で非常に印象的である。

この作者について又、彼女の他の作品について現在のところなんの資料も手許に持ちあわせておらず、多くを語れないのが残念であるがこの作品“*The Slave with Two Faces*”は現実社会に生きるきびしさを寓話という非現実的な設定の中に短くまとめた佳品といえよう。

なお、この作品はユージン・オニールを生んだ *The Provincetown Players* 劇団によって1918年1月25日に New York おいて初演されている。

Text: *Fifty Contemporary One-Act Plays*, (Stewart Kidd, Company Publisher Cincinnati)